



No. 100 2021. 1. 5

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

2021年は越境の年？ もうはじまっているアフターGIGA スクールに向けて

明けましておめでとうございます。コロナ禍で不透明な社会状況の中、2021年がスタートしました。

昨年11月には、中教審で“2020年代を通じて実現を目指す新しい時代を見据えた学校教育の姿”として議論されてきたものが“「令和の日本型学校教育」の構築を目指して”（答申素案）として出され、12月にはパブリックコメントとして広く意見が募集されています。



「令和の日本型学校教育」とはどんな姿なのでしょう。 「令和の日本型学校教育」を考える時、新学習指導要領とともに、“OECD Education 2030”も参考になるのではと思っています。時代が大きく変わっていく中で、教育を変化させていく必要性を感じとっていくことも必要になってくるのではと思います。

そんなことを考えながら答申素案を見ている時に、教育情報サイト「リセマム」の“10周年特別企画「アフターGIGA スクールの学校とEdTech」”というオンラインライブイベントの案内が目に入ってきました。もう「アフターGIGA スクールなの」と正直思いましたが、登壇者をみると情報通信総合研究所の平井聡一郎さん、経済産業省サービス政策課長・教育産業室長の浅野大介さん、昭和女子大学附属中学校・高等学校校長の真下峯子さん、ライフイズテックの讃井康智さん、Libryの後藤匠さん、すららネットの久保田航さん、COMPASSの神野元基さん、コードタクトの後藤正さんと現在民間教育企業の立場からGIGAスクール構想を推進されておられる方々がたくさんおられ、「アフターGIGA スクール」というのが妙に納得できました。また浅野さんがよく言われている「越境」が本当に進み始めているのだなとつくづく感じさせられました。



オンラインライブイベントの対話では

- 情報端末は持ち帰りが基本
- ミツバチのように飛び回るインフルエンサー的な役割を果たせる教師
- 学校を超えたオンライン上での“未来の職員室”
- ビジョンがないまま情報端末が手元に ・転職できる教師、副業できる教師
- 動画で OK の学びも →オンラインも対面
- 教科の中の宇宙でさまよう教科研究
- 教材費の見直し、教材費でアプリの導入に、ランドセルの購入を情報端末の購入に
- ウィンドウズ95から25年、教育の世界が踏み出せず
- 教師が「わからない、一緒に学んでいこう。教えてくれ。」と言えるプログラミング教育
- 「わからない」と言えない上司は企業ではダメ

- 混乱の中で生きるのが人生、混乱をみんなで楽しく解決する「ネットワーク型社会運動」
- 学習指導要領は解釈次第、主体的対話的な深い学びを実現するために解釈し要するにこういうことですよと言えれば OK
-

こういった興味深く、新鮮で、刺激的であり考えさせられる話が次々と飛び出して2時間45分でした。その対話の中で、“OECD Education 2030” で出された「学びの羅針盤」が頭に浮かんできました。また、対話を聞きながら GIGA スクール構想の中でこれまではタブー感のあった民間教育企業との連携・協働がなければ GIGA スクール構想が進まないということを改めて実感しました。民間教育企業との連携・協働がタブーではなく、普通と考えられるようになるか、また、そうした準備を始めないといけないのではと思います。登壇された方の企業をホームページで見ると、

- 【ライフイズテック】 「教育×IT×エンターテインメント」で、子ども達の未来を変える！
 - 【Libry】 一人ひとりが自分の可能性を最大限に発揮できる社会をつくる
 - 【すららネット】 教育に変革を、子どもたちに生きる力を
 - 【COMPASS】 Let's find your future 未来の君に 会いにいこう
 - 【コードタクト】 「学び」を革新し、誰もが自由に生きる世界を創る
- 個の力をみんなで高め合う「学びの場」を創る

といった企業理念があがっていました。この企業理念は学校教育目標にもつながるものであり、これからの時代をいきる子どもたちを育てるにはこうした視点も必要なんだろうなと思いつつ、学校教育目標としてはなかなか出てこないフレーズではと思います。

このように、いろいろな場所で、いろいろな形で「越境」が始まっており、学びのあり方の変化に対応していくためには対話の重要性がますます増してきているのだと思います。これまでなかった「越境」という概念が、2021年には必要になってくるのではと思います。そして、「越境」することで「令和の日本型学校教育」の目指す、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」を生みだしてくるのではと思います。「越境」には対話が必要であり、学校・保護者・地域・子どもが同じテーブルで対話を重ね、自らで「越境」していくスタートの年になればいいなと思っています。

宝物は足元に



コミュニティ・スクールの導入といっても戸惑われている学校が多いのではと思います。中学校でも2021年から新学習指導要領が始まるにあたり、もう一度現在各学校で取組まれていることを“新学習指導要領”や“OECD Education 2030”を参考にして見直してみると宝物になる取組がいっぱいある

のではと思います。コミュニティ・スクールをつくるのではなく、“新学習指導要領”や“OECD Education 2030”を参考にしてこれからの時代に必要な資質・能力を身につける仕組みをつくっていくことがコミュニティ・スクール、そんなことを12月30日の神戸新聞の記事を見ながら感じています。

これからはいろいろなものつなぎなどを感じ、いろいろなものをつなげていく発想を生みだしてくれるのがコミュニティ・スクールだと思います。 (文責:北本)